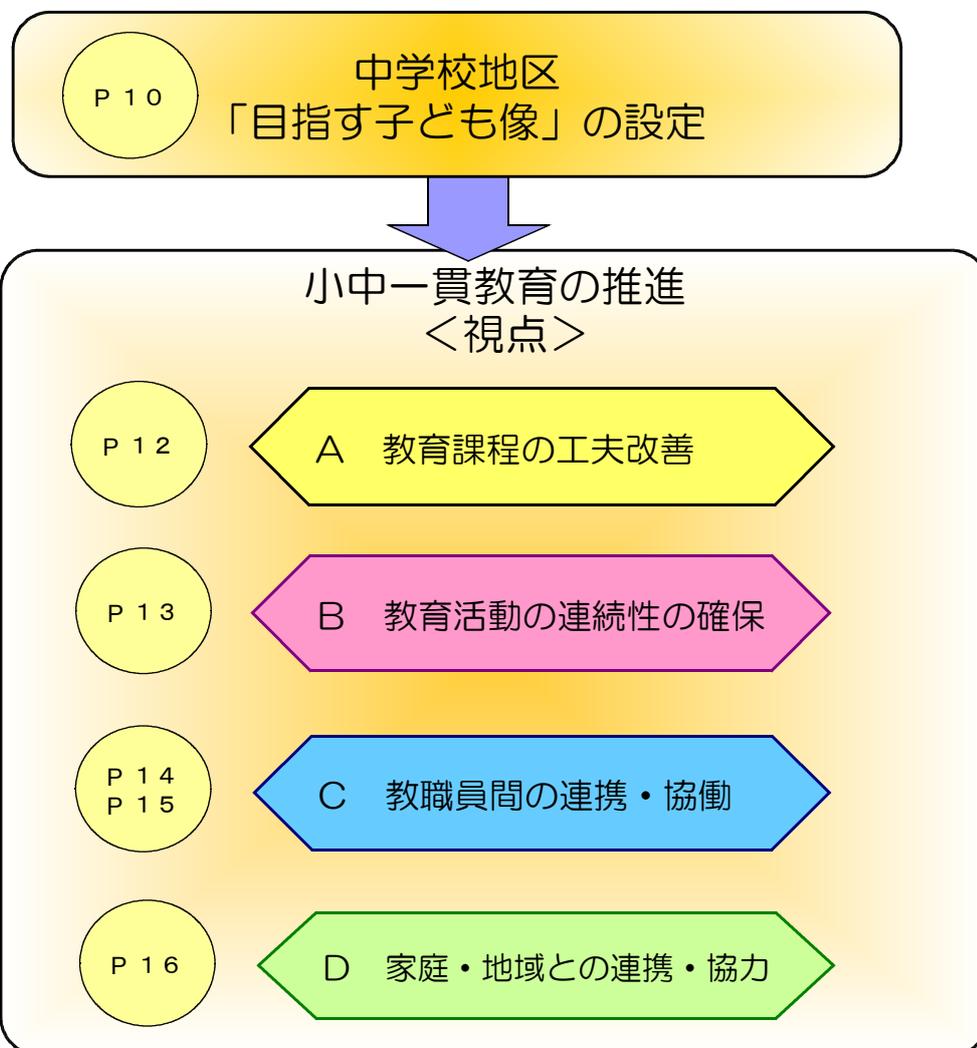


3 推進に向けた4つの視点

目指す子ども像の実現を目指し小中一貫教育を推進するにあたり、A～Dの視点を設定します。



A 「教育課程の工夫・改善」

教育課程の編成や指導形態等の工夫・改善を図り、確かな学力、健やかな体、豊かな心の育成を図ります。

B 「教育活動の連続性の確保」

子どもたちの教育活動の連続性を高め、安心して学べる場を提供します。

C 「教職員間の連携・協働」

教職員間の連携や協働を深め、共通理解のもと一貫した指導を充実させます。

D 「家庭・地域との連携・協力」

家庭や地域との連携・協力を一層推進し、地域と一体となった教育活動を進め、社会性や郷土愛を育みます。

A 教育課程の工夫改善

9年間を見通し、系統性や連続性を確保した教育課程を編成・実施することが、小中一貫教育の要となります。そのためには、目指す子ども像を共有し、発達の段階に応じた縦のつながりと各教科等の横のつながりを意識し、教育課程全体を編成することが重要です。

各教科等における指導以外にも、児童生徒の実態や課題を踏まえ、どのような取組を一貫させたり、発展的に継続させたりできるかを検討することも必要です。「学び」と「育ち」両面から一貫性と継続性のある効果的な取組を学校全体で進めましょう。

具体的な取組（例）

○教育課程上の位置付けの工夫

- ・異学年交流や交流授業など、児童生徒や教職員の交流事業について、活動の目的に応じて学校行事や年間指導計画へ位置付ける。
- ・小中一貫の日を位置付ける。

○地域人材の活用

- ・地域の特性を生かした教育活動を推進できるよう、各教科等における年間指導計画へ位置付ける。

○しもつけ未来学習の実践（2019年度～） ※注

- ・外国語活動、外国語科を中心とした各教科等において、ふるさと学習との関連を図れるよう、年間指導計画や課題設定の工夫をする。

※注

しもつけ未来学習（2019年度～）

○ねらい

- ・小中一貫教育の一つの柱として、外国語活動・外国語科の中に「しもつけ未来学習」を位置付け、英語によるコミュニケーション能力を育成する。
- ・ふるさと下野市に誇りをもち、将来国際社会で生きる一員として、英語を通して積極的にコミュニケーションを図ることができる児童生徒を育成する。

○教育課程上の位置付け

＜対象学年＞ 小学校1年生～中学校3年生

＜活動時間＞ 学校裁量の時間による英語活動（小学校1～2年生）
外国語活動・外国語科（小学校3年生～中学校3年生）



B 教育活動の連続性の確保

下野市では、平成20年度から児童生徒同士の様々な交流活動を実施してきました。異学年交流は、児童生徒の思いやりやコミュニケーション能力を育んだり、リーダーシップを育成したりすることにつながります。また、小学校高学年児童にとって、中学生との交流や授業体験は、進学への不安を軽減し、あこがれの気持ちをもつことにつながっています。

これまで積み重ねてきた成果をもとに、教職員間で更なる連携・協力体制を築きながら、各学校の特色を生かした取組を進めましょう。

具体的な取組（例）

小中での交流活動

- ・小学生による中学校での発表会（合唱等）への参加
- ・テレビ会議システム等を使った交流
- ・地域清掃やあいさつ運動
- ・小学生高学年の中学校部活動への参加
- ・児童生徒会活動での交流（※子ども未来プロジェクト）
- ・学校行事への参加

小中での合同授業

- ・小中合同での英語授業
- ・総合的な学習の時間における合同授業



※子ども未来プロジェクト

下野市内小中学校の交流を通して、自らの手でよりよい学校づくり、よりよい地域づくりのため、主体的に考え、行動できる子どもの育成を目的としています。

「いじめをしない・させない・見逃さない」など、正しい判断のできる子どもを育てます。



C 教職員間の連携・協働

小・中学校の教員が互いの学校の教育を理解するためには、小学校教員は自らが指導する内容が中学校における学習にどのようにつながっていくかを理解しながら指導し、中学校教員は小学校における学習の程度を把握した上で各分野の指導をすることが必要です。教員同士が連携して授業改善に取り組むことで、多くの子どもたちにとって見通しと安心感のある授業を実践しましょう。

具体的な取組（例）

○相互乗り入れ授業

- ・学習指導や児童生徒指導についての共通理解を図り、協力体制を築く。

○児童生徒の相互理解

- ・情報の引継ぎを通して、児童生徒の理解や多様な支援や配慮の在り方について検討する。
- ・問題行動の早期発見・早期解消へつながる取組について共通理解をする。

○特別支援教育（学習環境への配慮）

- ・安心して過ごしやすい学習環境について共通理解を図る。
例：通常の学級におけるユニバーサルデザインの授業、集団の中での個別の指導
- ・個別の教育支援計画、個別の指導計画の内容や方法を工夫する。

○授業改善への取組

- ・授業での指導方法について情報交換をし、効果のある指導方法を発展的に継続していく取組について話し合う。
例：ペア学習、グループ学習の進め方、机の配置、「話型」指導、発表の仕方、聴き方、思考ツールの活用、ノート指導の方法、「振り返り」の仕方

○家庭学習

- ・家庭学習の目安（小・中学校での指導の違い）や「自主学習ノート」、「家庭学習ノート」の指導について共通理解を図る。



○学習及び生活規律

- ・重点を図るべき指導についての共通理解を図る。
例：校則、生活のきまり、清掃活動への取組方、チャイム着席、教室環境



○年間指導計画や指導計画の活用

- ・全体計画や年間指導計画をもとに、教科書をもとに指導内容等についてのつながりや違いを確認する。
- ・単元と単元の間を系統図として整理し、複数の学年で繰り返し指導する内容や学年間の結び付きを確認する。

○各種学力調査結果との関連

- ・重点的に指導すべき単元等について確認し、学習内容や指導方法、配当時数等について検討を行う。

○評価に関する工夫

- ・小中における評価等の実施方法の違いについて知る。
- ・テスト問題の分量や解答形式の違い等を共有し、円滑な移行を図れるようにする。
- ・小学校終了段階での到達目標について共通理解を図る。

※ 様々な取組が考えられますが、P(Plan)-D(Do)-C(Check)-A(Action) サイクルに基づく取組の改善への意識をもつことが大切です。

例：教科等を横断した学習指導に関する研究



〇〇中学校区の△△部会では、コミュニケーション能力を育成するため、児童生徒の実態をもとに「聞き方・話し方のステップ」を作成しました。



聞き方・話し方のステップ（小5・小6・中1用）

ステップ	聞き方	話し方
4	話している人の考えを聞いて、自分の考えを広げる。	自分の考えについて、根拠や理由が伝わるように話す。
3	話している人の考えと自分の考えを比べながら聞いて、感想や意見をもつ。	友達の考えと自分の考えを比べながら話す。
2	質問ができるよう、話の中心に気を付けて聞く。	話す事がらを、順序立てて、伝えたいことの中心が分かるように話す。
1	話している人の方を向いて相づちをするなど、反応をしながら聞く。	聞いている人の方を向いて、全員に聞こえる声ではっきりと話す。

中学校区内の小・中学校で共通に取っていきます。

- ・ 第一段階として、国語と算数（数学）の授業で、子どもたちへの意識付けを図る。
- ・ 小中の先生方が互いに授業参観し、授業後に「話し方」に焦点を絞った授業研究会等を行う。

- ・ 授業研究会での成果や課題をもとに、見直しが必要な点について話し合い、改善策等を探る。
- ・ 効果のあった指導方法などを共有する。

- ・ 改善策をもとに、新たな取組等を行う。
- ・ 成果が確認できない場合は、方法を変えるなどして、次年度引き続き取り組めるようにする。

※ C・A（確認・改善）を充実させることが、PDCAサイクルを効果的に回すポイントになります。



D 家庭・地域との連携・協力

学校は家庭や地域とのつながりを意識し、家庭や地域と一体になって子どもたちを育てることが求められています。相互の連携を強化しながら、地域とともにある学校づくりを推進し、未来を生き抜くたくましい子どもたちを育てましょう。

具体的な取組（例）

○家庭・地域との連携を深める企画の年間行事計画等への位置付け

- ・小中学生による、地域行事の発表会への参加
- ・奉仕活動、伝統行事等への参加
- ・総合的な学習の時間（例：ふるさと学習）における地域の人々との交流
- ・民間、地域の教育力の活用

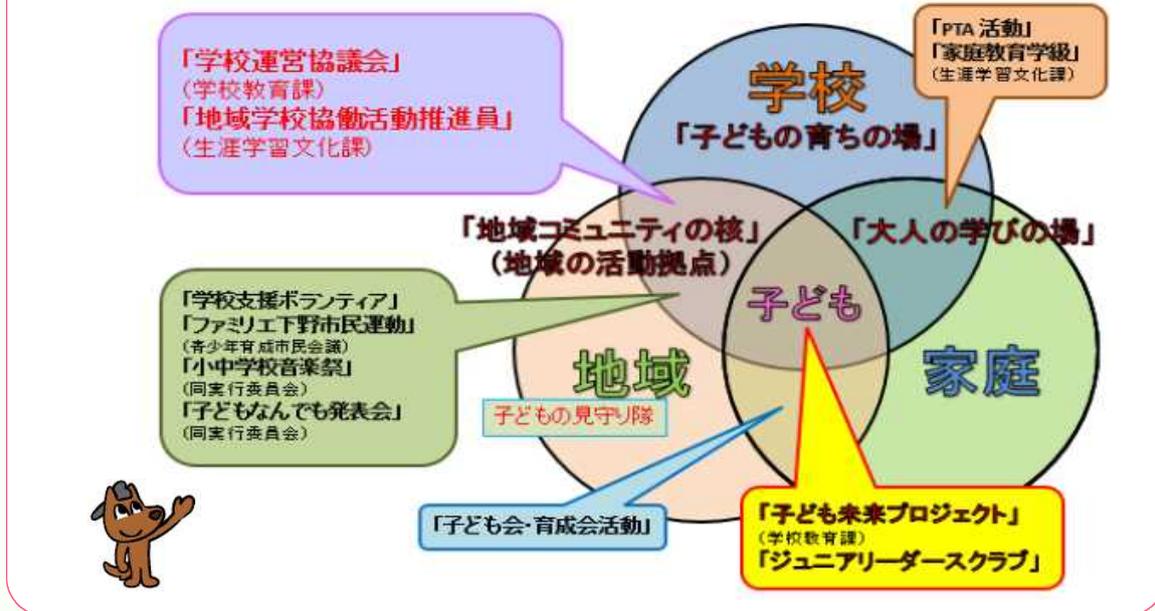
○小中合同の研修会等での情報共有

- ・地域の行事の活動内容や活動状況の把握
- ・家庭状況の把握

○家庭や地域の理解を深めるための取組

- ・便り等での情報発信、家庭教育学級等
- ・地域住民による学校の発表会等への参加
- ・小中一貫教育に関する意見交換の場の設定

「地域とともにある学校」のイメージ



※ 「学校運営協議会」

どのような子どもを育てたいかという目標を地域と学校が共有し、地域と学校が支え合える、地域とともにある学校づくりを目指します。

※ 「地域学校協働活動推進員」

学校と地域をつなぐコーディネーターの役割を果たします。